

## 課題探求とアイデンティティ感覚の変容

—大学生の進路選択期に着目して—

高 村 和 代

### 問題と目的

青年期は進路選択、恋愛、職業選択といった様々な体験の中から意志決定をしていく。そしてその過程で、自己意識を再統合していくことを通して、「自分は自分であり、自分は他者とは異なった存在である」ことを感じ、アイデンティティの感覚が培われていくと考えられる。つまり、人はある課題探求を行うことによりアイデンティティ探求が行われていくと仮定される。本研究では、この仮説の下で課題探求中にアイデンティティの感覚がどのように変容していくのかという、アイデンティティ形成のプロセスを検討することを目的とする。

アイデンティティを扱った研究はこれまでも数多く行われてきている。そこで用いられる方法は大別して、質問紙法、Q分類法、面接法の3種類に分類されるが、本研究のような主観的概念であるアイデンティティを捉えるような仮説検証を行うには、個人の自己意識や感情、考え方などを臨機応変に自由に引き出すことができる面接法を用いることが最も適切な方法であると考えられる。そして、面接法の依拠する枠組みとして特に評価されるものに、Marcia アイデンティティ・ステータスモデルがあげられる。このモデルは、アイデンティティ研究の中で現在最も主流となってきている枠組みの一つである。しかし、近年このモデルについて、個人間の違いの研究には適しているが、個人内の発達的变化にはあまり適さない(Bosma & Jackson, 1990)とか、個別に得られたデータを4つのステータスに分類してしまうために、個々人の主観的な体験についての検討ができない(Glodis & Blasi, 1993)といった限界点が指摘されるようになった。このような限界点を克服するために、Grotevant (1987) はアイデンティティの概念的枠組みとして、アイデンティティ形成のプロセスモデルを提唱している。このモデルによれば、ある領域におけるアイデンティティの探求は、探求に携わるための方向づけがなされ、それによって進められる。そして、探求のプロセスへの従事によって、感情的、認知的結果が生み出され、新しく統合されたアイデンティティ感覚に強化/統合(consolidation)されていく。そして、強化/統合されたアイデンティティの感覚を、現在の環境との適合性の観点から評価されることにより、アイデンティティ

が形成されていくのである。このプロセスモデルは、課題探求を行っていく過程で、アイデンティティ探求を行っていることを検討しようとする本研究に適していると考えられる。また従来行われてきたアイデンティティ研究では取り上げられなかった、アイデンティティの主観的な側面を捉えようとしていることに意義があると思われる。しかしながら、このプロセスモデルについての実証的研究はまだ行われていない。

以上の知見から、本研究では課題探求とアイデンティティ探求の関連と、その過程について検討するために、Grotevantのアイデンティティ形成のプロセスモデルを分析の枠組みとして用い、大学4年生の卒業後の進路選択という課題に着目し、縦断的面接調査を行うことにより、以下の点について検討することを主な目的とする。

- ・Grotevantのアイデンティティ形成のプロセスモデルの妥当性について

- ・課題探求とアイデンティティ探求の関連について

**面接対象者**：東海、近畿地方の3国立大学4年生の学生30名(男性14名、女性16名)

**面接方法**：3回の面接とも、一対一の半構造化面接で行われ、面接の所要時間は、15分～60分(平均約45分)であった。面接の記録は全て被面接者の承諾を得て、テープレコーダーに記録された。

**面接時期**：第1回 就職活動等の課題探求の初期(6月3日～6月30日)、第2回 ある程度課題探求が進行している時期(7月11日～8月10日)、第3回 内定式および一部の大学院入学試験が終了し、課題探求が一応の終了をみている時期(10月20日～11月7日)

**面接内容**：本研究では、面接で語られたことを最も適切に分析し得ると考えられる枠組みを提供するために、Grotevantのアイデンティティ形成のプロセスモデルに若干の要約を施し、その枠組みに沿うように質問を行った。

### 結果と考察

まず、テープレコーダーに記録された内容から逐語録を作成し、さらに語られた内容を、要約、分類した。なおこの要約作業は筆者が単独で行ない、作業時には、語られた内容をそのまま要約し、解釈を行なわないように

留意した。

結果に要約された30ケースのうち、第一回面接ですでに決定をしてしまっている1ケースと第三回面接でまだ未決定であった7ケースを除いた、22ケースにおいて、進路選択という課題領域において、Grotevantのアイデンティティ形成のプロセスモデルに適合するケースと、適合しないケースの選別を試みた。選出に際しては、大学院で教育心理学を専攻している学生1名と筆者の計2名が個別で行い、その後一致率を算出した。その結果、22ケース中19ケースにおいて一致し、一致率は86.4%であった。この割合は満足し得る数値であると思われる。従って、この選出については信頼でき得るものと考えられる。なお、一致しなかった3ケースについては、2者の協議の下に適合ケースと、不適合ケースに分類した。

以上のような各ケースについての検討の結果、Grotevantのモデルに適合したケースは22ケース中10ケースと判断された。アイデンティティ感覚は、主観的概念であり、個人の文化・社会的背景のもとで形成されていくものであるため、かなりの個人差があると考えられる。また、面接においては被面接者と面接者とのバイアスを極力減らすために細心の注意を払ったが、自己の内面を引き出す質問がほとんどであるため、被面接者によっては防衛している場合も考えられる。このような困難な状況の中で、Grotevantのモデルに沿ったケースが22ケース中10ケース見られたことから、このモデルはある程度妥当性があると考えられる。さらに、このGrotevantのモデルは、アイデンティティ感覚が変容するためには、何らかの課題探究を行うことが前提とされる。すなわちこのモデルの妥当性がある程度説明されたことは、課題探究を行うということは同時に、アイデンティティ探究も行われていると考えられるという本研究の仮説を支持することになる。

また、Grotevantのモデルに沿わなかったケースを検討してみると以下の5つの特徴的パターンが見られた。

- ①課題に対して主体的な探求が行われていない。
- ②課題探求活動とアイデンティティの探求が分離している。
- ③探求プロセスでの結果がアイデンティティ感覚に結びつかない。
- ④現在のアイデンティティに基づいた課題探求を行っている。
- ⑤進路選択という課題探求以外の課題探求によりアイデンティティ感覚が変化している。(このパターンはすなわち、他の領域ではアイデンティティ形成のプロセスが進んでいると考えられる。)

本研究の結果から先述したように、Grotevantのモデルに適合していると思われるケースは22ケース中10ケースあり、このモデルはある程度の妥当性を持っていると言えよう。しかしながらGrotevantは、モデル①②③のような逸脱があることを記していない。そこで、本研究で得られた知見を基に、Grotevantのモデルにモデルから逸脱していくケースを加えたものがFig.1である。この修正されたモデルに従えば、本分析の対象である22ケースのうち、④現在のアイデンティティに基づいた課題探求を行っている2ケース以外の20ケースについて、適合しているということが可能になる。従って、Fig.1に示したような修正を、Grotevantのモデルに加えることにより、モデルの説明力や妥当性をより高めることができたといえよう。しかしながら、本研究ではGrotevantのモデルに適合しなかった理由について読みとめることは不可能であった。この理由については、今後さらに検討する必要があると思われる。

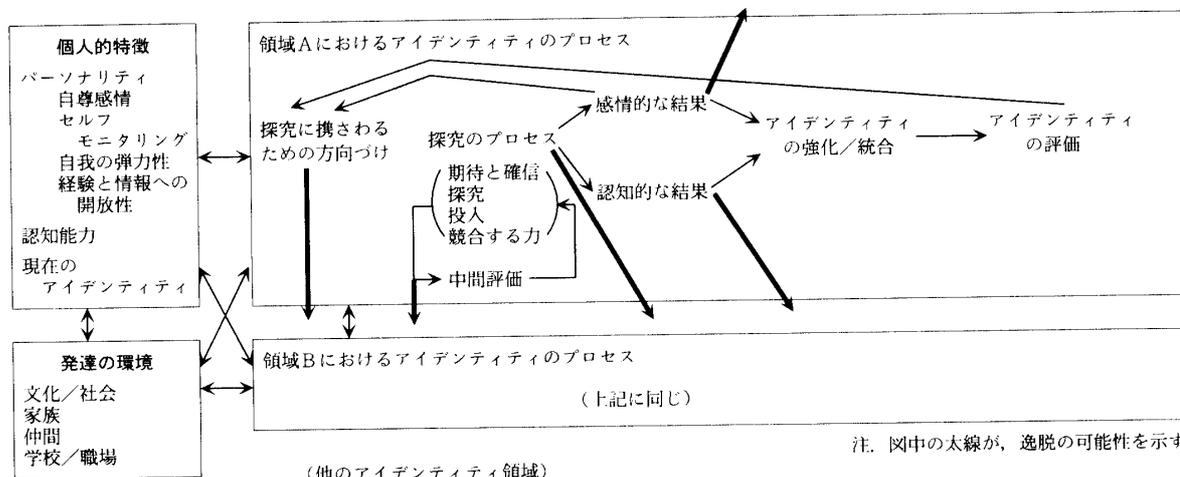


Fig.1 アイデンティティ形成のプロセスモデルからの逸脱の可能性